

第 79 回東邦医学会総会 予稿集

令和 7 年 11 月 10 日(月)

A. 大学院生研究発表

1. 移植腎に発症した cFSGS の臨床病理学的検討
植松 光 (代謝機能制御系腎臓学)
指導教授：酒井 謙 (内科学講座腎臓学分野)
【背景】腎移植患者で collapsing FSGS (cFSGS) は non-collapsing (ncFSGS) に比して慢性組織障害の Banff スコアが高いと報告されている (NDT 2006)。【方法】2017 年から 2022 年に移植腎生検で FSGS と診断した検体をバリエーション診断し、臨床所見、Banff スコアで評価した。【結果】cFSGS は ncFSGS に比して有意に移植後期間が長く、eGFR 低値、蛋白尿高値、収縮期血圧が高値であった。【結論】腎移植後 de novo cFSGS には小動脈硬化と間質線維化が関連していた。

B. プロジェクト研究報告

2. 網膜静脈閉塞症における、発症後血圧変化が眼科予後に与える影響の検討
渡辺 研人 (眼科)
【目的】網膜分枝静脈閉塞症 (BRVO) において、発症後の血圧の変化が予後に与える影響を検討した。【対象と方法】対象は、BRVO24 眼。初診時に高血圧を有した群を 3 か月経過した時点で内科治療に反応した血圧下降群と非下降群に分け、眼科的治療回数を比較した。【結果】血圧下降群における治療回数、再発率が非下降群と比較して有意に少なかった。【結論】発症後の高血圧の改善と BRVO の再発・治療回数に関係がある可能性が示された。

C. 柳瀬武司奨学基金受賞講演

3. Comparative Analysis of Castration-Resistant Prostate Cancer Subtypes: Identification of MEK Signaling as Therapeutic Target in Double-Negative Prostate Cancer
堀 俊介 (細胞生理学教室)
Androgen receptor 標的治療に抵抗性を示す去勢抵抗性前立腺癌 (CRPC) はその表現型から 3 種類の subtype に分類できる。細胞株やオルガノイド、ゼノグラフトを含む公開データの遺伝子解析を行い、各 subtype に特徴的な分子シグネチャーを解明した。その中で特に予後不良な double negative 前立腺癌 (DNPC) における MEK シグナルの亢進と、治療標的としての有効性を評価した。
4. [プロジェクト研究報告を兼ねた講演]
肺 Mycobacterium avium complex 症の治療効果を反映する新規バイオマーカーの探索
若林 宏樹 (内科学講座呼吸器内科学分野(佐倉))
肺 Mycobacterium Avium Complex (MAC) 症は難治性慢性下気道感染症であり、喀痰培養陰性化が治療効果判定の唯一の指標とされる。しかし、定量的評価が出来ない、喀痰が出ない患者がいるなど複数の問題がある。我々は過去に未治療の肺 MAC 症患者の血清酸化ストレス値が重症度に応じて高くなる事を報告した。本研究では治療前後の血清酸化ストレス値が治療効果判定に使用可能かを前向きに検討した。

F. 研修医発表

7. 硬膜穿刺後頭痛に対しブラッドパッチが奏功した一例

植村 耀子（研修医）

指導：繁田 知之（総合診療・急病センター(内科)）

症例は25歳女性。腰椎穿刺後、座位で増悪し臥位で改善する頭痛を認め、腰椎MRIでL3-4レベルで左前方に髄液漏出所見を認めたことから硬膜穿刺後頭痛と診断され、1回目の硬膜外自家血注入療法を施行し頭痛は改善し一度退院となった。しかし症状が再燃したため、外来にて硬膜外ブロック生食注入を施行したところ頭痛が改善したため、再度2回目の硬膜外自家血注入を行い翌日に頭痛は著明に改善し退院となった。

8. 肺病変を伴った成人 still 病の一例

小菅 将明（研修医）

指導：繁田 知之（総合診療・急病センター(内科)）

症例は23歳女性。受診7日前からの発熱を主訴に受診した。身体所見では紅斑・リンパ節腫脹・咽頭痛を、検査所見では2系統の血球減少・脾腫を認めた。山口基準で項目を満たしたため、成人 still 病の診断となった。入院後に新規の間質性肺病変を認めたため、ステロイドパルス＋シクロスポリンで加療を行った。体温やフェリチン値は改善傾向であり、入院36日目に退院となった。

G. 研修医発表

9. 意識変容をきたした外傷性硬膜下水腫の1例

遠藤 豪介（研修医）

指導：繁田 知之（総合診療・急病センター(内科)）

84歳女性。転倒を契機に幻覚、意識変容が出現。前医にて硬膜下水腫を指摘されている。髄液検査では蛋白増加あり脳炎は否定できず頭部MRI、脳波施行するも異常所見は認めず。フォローの頭部MRIにて血腫への移行を認め五苓散内服を開始したところ意識状態は改善認め硬膜下水腫/血腫による症状であったと考えられた。

令和7年11月11日(火)

I. 研修医発表

11. 清掃業従事者での *Erysipelothrix rhusiopathiae* による化膿性脊椎炎の1例

岩瀬 奎輝（研修医）

指導：森 岳雄（総合診療・急病センター(感染症)）

腰痛を主訴に来院した60代女性。MRI検査にて化膿性脊椎炎を認め、椎間板から *Erysipelothrix rhusiopathiae* が検出され、アンピシリン注にて治療した。本菌は豚丹毒菌とも呼ばれ、ブタの皮膚軟部組織感染症を起こす人獣共通感染症であり、ヒトでの報告は少ない。さらに患者は畜産との関連もなく、清掃業中の土壌曝露による感染が示唆された貴重な症例であり、過去の文献とともに報告する。

12. 蜂窩織炎と診断され保存的加療となっていた壊死性筋膜炎の経過と遺伝子型の関連

吉田 一希（研修医）

指導：森 岳雄（総合診療・急病センター（感染症））

糖尿病既往の60代男性が左下腿腫脹にて受診した。CT検査結果から蜂窩織炎と診断され保存的加療となっていたが、翌日壊死性筋膜炎が疑われ拡大デブリードマンを施行された。創部の培養から *Streptococcus pyogenes* が検出され、遺伝子検査で *emm81* と同定された。*emm* 遺伝子は病原性や臨床像との関連が示唆される重要な遺伝子であり、疫学や過去の症例を交え報告する。

J. プロジェクト研究報告

13. 組織酸素飽和度モニターを用いた消化管手術再建腸管の血流動態の解明と縫合不全減少への寄与の検討

石井 賢二郎（大橋病院外科）

消化管再建における合併症に縫合不全があり、主要原因として血流低下による組織障害が挙げられる。血流に影響を与えるものとして術中因子や患者因子がある。この再建消化管血流の評価はこれまで色調や出血の勢い、色素の浸透具合といった定性的で主観的なものであったが、定量的評価が必須である。近年、組織酸素飽和度が簡便に測定可能となったため、それを指標として再建腸管血流の時間的・部位的变化を評価し血流動態を解明する。

14. 緑内障点眼薬とマイボーム腺機能障害の関連性の検討

藤田 智子（東邦大学医療センター大森病院 眼科）

緑内障点眼薬の長期使用が前眼部に与える影響を調査するため、緑内障患者42例84眼を対象に評価した。その結果、多くの症例で中等度以上のマイボーム腺欠損が認められた。特に3種類以上の点眼薬使用者やプロスタノイドFP受容体作動薬の使用群では、マイボーム腺機能不全の悪化が示唆された。

K. 一般演題

15. 気管挿管で用いる BURP 法の正しい施行部位

岩本 津和（東邦大学医療センター大森病院麻酔科）

BURP 法は気管挿管時に甲状軟骨を背側(Backwards) 上方(Upwards) 右方(Rightwards) に押し (pressure) 声門・披裂部の視認性を上げる手技である。今回 BURP 法は喉頭のうち甲状軟骨と輪状軟骨のどちらに施行することが正しいかを検証した。気管挿管時に複数の麻酔科医師が甲状軟骨と輪状軟骨を圧迫し視野評価(Cormack-Lehane 分類)を行った(n=37)。輪状軟骨を圧迫した方が優位に視野の確保が得られた(視野の確保: 輪状軟骨 28 例/甲状軟骨 17 例 p=0.03)。併せて BURP 法の解剖学的メカニズムについて報告する。

16. 腹腔鏡下腹部手術後の持続硬膜外鎮痛により上肢脱力とホルネル徴候を示した1例

岩本 津和（東邦大学医療センター大森病院麻酔科）

胸腹部手術後持続硬膜外鎮痛は早期離床が期待できる一方、合併症の理解が重要である。今回人工肛門造設術の翌日に上肢脱力を示した一例を経験した。胸部(Th7/8)硬膜外併用全身麻酔と術後硬膜外鎮痛を実施し、術翌日に右上肢脱力と眼瞼下垂(ホルネル徴候)を訴えた。硬膜外造影で C6/7 レベルまで広がり示した。硬膜外鎮痛の広がりでは、頸部領域の上肢脱力やホルネル徴候を、腰部領域の下肢脱力に注意が必要である。

L. 大学院生研究発表

17. Multiplex PCR-based rapid pathogen identification in acute cholecystitis: Implications for early targeted antimicrobial therapy

中村 岳（代謝機能制御系臨床腫瘍学）

指導教授：渡邊 学（臨床腫瘍学講座）

急性胆嚢炎・胆管炎は重症化しやすく、治療遅延や不適切抗菌薬使用は予後不良や耐性菌増加を招く。本研究では胆汁検体に対する multiplex PCR (FilmArray BCID2) の有用性を検討した。急性胆嚢炎 77 例の胆汁検体に対し院内培養と PCR を施行した結果、PCR は感度 79.4%、特異度 100% を示し、多菌種感染や菌量が多い症例で有用性が高かった。迅速な起因菌同定は早期適正治療と抗菌薬適正使用に寄与すると考えられた。

18. [柳瀬武司奨学基金受賞講演およびプロジェクト研究報告を兼ねた講演]
シングルセルイメージングを用いたインターロイキン 33 の細胞外放出機構の解明

鹿子木 拓海（生体応答系呼吸器内科学）

指導教授：岸 一馬（内科学講座呼吸器内科学分野）

インターロイキン-33 (IL-33) は喘息に関わる炎症性サイトカインだが、細胞死に伴う放出機構は不明点が多い。本研究では IL-33-mCherry 発現細胞を用い、IL-33 の細胞死に伴う放出機構をシングルセルイメージングで解析した。ネクロプトーシスでは MLKL 依存的膜損傷と同時に IL-33 が放出された。一方、後期アポトーシスでは NINJ1 依存的膜破裂と一致して IL-33 が放出された。

M. 医学研究科推進研究報告

19. 減量・代謝改善手術患者の脂肪組織を用いた動脈硬化促進および抑制因子の探索

齋木 厚人（内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌学分野(佐倉)）

一般に、肥満は動脈硬化性疾患の危険因子とされるが、一方で肥満度が高いほど予後が良好とされる“obesity paradox”という現象も報告されている。我々は減量・代謝改善手術時に脂肪組織を採取し、網羅的遺伝子解析に加え動脈硬化マーカーの測定を行った。その結果、皮下脂肪由来の動脈硬化抑制因子として LPL (Obesity Facts, 2024)、内臓脂肪由来の動脈硬化促進因子として VAP-1 (Obesity Facts, 2025) を同定した。

令和 7 年 11 月 12 日(水)

P. 研修医発表

22. 呼吸器離脱後急速に呼吸状態増悪、再挿管・VV-ECMO 再導入となったムコイド型侵襲性肺炎球菌性肺炎の 1 例

加藤 千尋（研修医）

指導：中道 嘉（救命救急センター）

呼吸器離脱後急速に呼吸状態増悪、再挿管・VV-ECMO 再導入となったムコイド型侵襲性肺炎球菌性肺炎の 1 例。ムコイド型菌株が抗菌薬に感受性があるものの重症化しやすいこと、また自発呼吸トライアル (SBT) 施行したが T ピースでの SBT まで行ってから抜管の方が安全であった可能性が考えられた。

23. 結節性多発動脈炎の診断に至った 1 例
 西井 隆悟（研修医）
 指導：山田 篤史（総合診療・急病センター(内科)）
 結節性多発動脈炎は、主に中型血管の血管壁に炎症を生じる疾患である。現時点でこの疾患に対する特異度の高い診断マーカーは存在せず、多くの症例で原因は不明である。平均発症年齢は 53 歳であり性差はほとんどない。症状は多岐にわたり、炎症による全身症状と罹患臓器の炎症、虚血、梗塞による臓器障害が見られる。今回、75 歳男性が発熱、両下肢痛を主訴に来院し血管造影検査にて結節性多発動脈炎の診断に至った 1 例を報告する。
24. 皮疹と関節痛で受診し IgA 血管炎と考えられた 1 例
 本田 安珠（研修医）
 指導：山田 篤史（総合診療・急病センター(内科)）
 IgA 血管炎において関節痛と関節炎は最大 84%にみられ、皮疹は約 75%にみられる症状である。今回、若年成人女性が関節痛と紅斑で受診し、IgA 血管炎と考えられた一例を経験した。本疾患はその大多数の症例が小児で罹患するがそのうち 10%程度が成人発症例である。外来にて対症療法のみで治癒する例も多いが、入院を必要とする例やステロイド療法を必要とする例もあり、十分留意する必要がある。
25. マクロライド耐性マイコプラズマ肺炎が疑われた 1 例
 渡邊 早紀（研修医）
 指導：山田 篤史（総合診療・急病センター(内科)）
 36 歳女性、発熱・咳嗽などで来院した。胸部 CT で左上葉にスリガラス影を認め、抗原陽性よりマイコプラズマ肺炎と診断された。来院 4 日前からアジスロマイシンで加療するも症状改善なくマクロライド耐性を疑いレボフロキサシンに変更したところ、第 2 病日には解熱、第 4 病日退院となった。マクロライド耐性はアジアで増加しており、初期からのテトラサイクリン系やレスピラトリーキノロン系の使用も推奨される。
26. 海外渡航者のレジオネラ肺炎が疑われた一例
 内野 正智（研修医）
 指導：山田 篤史（総合診療・急病センター(内科)）
 レジオネラ肺炎において尿中抗原検査は L. pneumophila 血清群 1 のみ検出可能なため、他血清群や L. longbeachae 感染では陰性となりうる。
 本症例では海外渡航者が高熱、重度の肺炎像、低ナトリウム血症、消化器症状を認めたため、臨床的にレジオネラ肺炎を疑い尿中抗原が陰性でも臨床的にレジオネラ肺炎を疑った。
 尿中抗原検査の感度は高くはないため臨床症状と併せて疑い、適切な抗菌薬を投与することが重要である。

Q. 分科会報告

27. [東邦大学医療センター大橋医学会]
 「髄液 multiplex-PCR 検査で早期診断が可能であった吃逆と嚥下障害を呈した水痘带状疱疹ウイルス中枢神経感染症の一例」
 青柳 達（東邦大学医療センター大橋病院）
 指導：内 孝文、今村 友美、杉本 英樹、紺野 晋吾
 症例は 80 歳、男性。嚥下障害と吃逆で当院入院となった。皮疹はなく、髄液検査で細胞数増加を認め、multiplex-PCR 検査で VZV 陽性となり VZV 中枢神経感染症と診断した。アシクロビル治療開始後、吃逆は改善したが嚥下障害は遷延した。抗体検査に比べ迅速診断が可能な髄液 multiplex-PCR 検査は、神経症状を呈する症例でウイルス性中枢神経感染症を早期診断・治療する上で有用であると考え、報告する。

S. 研修医発表

29. 持続する頭痛を契機に発見された悪性腫瘍の多発骨転移の1例
山本 俊太郎（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療・急病センター(内科)）
80 台男性が持続する頭痛を契機に受診し、頭蓋骨を含む多発骨転移を認めた。PSA 高値より前立腺癌が疑われたが膀胱癌も併存、疼痛は緩和ケアでコントロール可能となり退院した。頭蓋骨転移は生命予後に直結しにくい、脳神経障害や QOL 低下を招くため迅速な診断と治療が重要である。本症例は悪性腫瘍のリスクを有する高齢者に原因不明の頭痛が続く場合、骨転移を鑑別に挙げる必要性を示した。
30. 肥厚性硬膜炎から眼窩先端部症候群をきたした一例
田波 直子（研修医）
指導：松本 直（眼科）
症例は 70 歳女性。半年前からの左側頭部痛、2 週間前からの左眼視力低下と複視を主訴に受診した。左視神経炎所見と左外転神経麻痺を認め、眼窩 MRI と造影 CT を施行したところ、高安動脈炎に続発する肥厚性硬膜炎による眼窩先端部症候群の診断に至った。眼窩疾患は多岐にわたるため適切な血液検査や画像検査が診断に有用であるが、画像検査においては症状から疾患を想定した上で適切な撮影条件を選択する必要がある。

T. プロジェクト研究報告

31. 妊娠初期におけるパートナーの喫煙と妊娠合併症との関連：新型タバコの影響の検討
秋山 実季（社会医学講座衛生学分野）
新型タバコ（加熱式・電子タバコ）の受動喫煙が妊娠に及ぼす影響は明らかでない。本研究では、鎖肛の予防因子探索を目的とした症例対照研究の対照群から妊娠中に喫煙していなかった女性 1,354 人を対象とし、パートナーの自宅での喫煙状況を受動喫煙の指標として妊娠高血圧症候群(HDP)、妊娠糖尿病との関連を検討した。新型と紙巻タバコの併用は HDP と関連していた (OR 4.54, 95%CI: 1.60–12.82)。
32. 高精細 3D プリンターによる頭部立体模型を用いた神経内視鏡手術の教育
栄山 雄紀（脳神経外科学講座(大森)）
従来の頭蓋底腫瘍摘出術は大開頭を行い顕微鏡下に深部へ到達する方法が主流であったが、手術時間が長く高侵襲であるという課題があった。近年は小開頭で内視鏡を用いる低侵襲手術が導入されつつあるが、習得には高度な技術が必要で、十分なトレーニングを要する。今回、3D プリンターで作製した高精度頭部モデルを用い、神経内視鏡手術トレーニングの教育法を検討したので報告する。